様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　５月　１０日現在

機関番号：１５３０１
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2011
課題番号：21700602
研究課題名（和文）　幼児の表現力を高めるための舞踊記述型教育法の開発

研究課題名（英文）　Development of a New Educational Methodology Using Language of Dance to Enhance Children's Physical Expressivity

研究代表者
三戸　治子（酒向治子）（SAKOU　HARUKO）
岡山大学・大学院教育学研究科・講師
研究者番号：70361821

研究成果の概要（和文）：
LOD の理論研究から、LOD は幼児の個性や創造性を引き出すこと、「生涯学習」という観点から系統的な学習促進させること、また現在求められている幼児期からの多様な運動経験の学習という観点から有効である可能性が示唆された。実践研究からは、指導法として具体的な運動イメージを用いること、「覚える」ことを目指す「暗記型」ではなく、子どもたちに考えさせる「探求型」が有効である可能性が示唆された。また、実践例からは、幼児の記号に対する抵抗は見られなかった。

研究成果の概要（英文）：
From the results of theoretical researches, LOD is effective in drawing out individual creativity. Also, systematization of the teaching content has been encouraged by the Ministry of Education in order to cultivate a solid basis for physical education and develop practical experience in various exercise activities. LOD has the potential to fulfil the objectives, from the perspective of systematic learning in physical education, as well as encouraging various movement experiences.
From the results of experimental/practical researches, it seems to be effective to use images to induce various movements from children, and also the emphasis of teaching should be put on exploring physical movements rather than memorizing them. LOD seems to be an excellent method for children to approach physical movements while helping them relax their psychological resistance.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２０１０年度	600,000	180,000	780,000
２０１１年度	800,000	240,000	1,040,000
総　計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：総合領域
科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学　身体教育学
キーワード：教育学、授業研究、ダンス

１．研究開始当初の背景

LOD（Language of Dance；ダンスの言語、略称LOD）はルドルフ・フォン・ラバンの身体理論に基づき、人間の動きを動詞（主要は16種類の動作）・副詞（動作の質）・名詞（身体部位）からなる言語とみなす、体系化された身体の記号システムである。音楽でいえば楽譜に相当する記号であり、動きの譜面を用いながら動きの「読み・書き」（リテラシー）能力を養うことを目指す。この記述法による身体表現教育が近年欧米を中心に注目を集め、ている。しかし、こうした状況にも関わらず、学術研究的には萌芽的段階にある。LODアプローチによる指導実践例などは各地で報告されていても、包括的な分析や理論的な考察を行った研究は少ない。また、日本の身体教育においても、LODに対する研究や実践はほとんど行われてきていない状況であった。

２．研究の目的

LOD は動きの「読み・書き」という身体と知を総合的にとりあつかう、これまでにない身体表現教育法として、幼児の豊かな身体の表現力を養う有効なツールになる可能性がある。生涯を見通した新しい身体表現教育プログラムの構築を目指す上でも、成長の第一段階にある幼児を対象としたLODの教育プログラムの開発を行うべきであると思うに至った。そこで、理論研究と実践研究の両面から、LOD という記述法を用いた身体表現教育法の開発に取り組むことを本研究の目的とした。

３．研究の方法

本研究は、以下の論と実践の両面から行った。

（１）理論研究

①日本の教育／文化状況に応じた身体教育のプログラム開発を行うために、文献研究によって現在の日本における幼児を対象とした身体表現教育の現状と課題、及びそこにLOD を適用することの利点を浮き彫りにすることを目指した。

②身体表現教育プログラム開発にあたって英語から日本語への語彙の整理を行うことが必須であった。このため、国内外のLOD専門家とともに、LOD の教科書である *Your Move: A New Approach to the Study of Movement and Dance second edition*(2008)（1983年初版の改訂版）の日本語に訳す作業を進めた。これにあたり、国内では日本語の共同翻訳者となる森田玲子氏、国外からは *Your Move* の著者であるA.H.ゲスト氏、イギリスのLOD指導者であるV.ファラント氏の研究協力を得ることとした。

（２）実践研究

幼児を対象とした身体表現教育プログラムの開発にあたり、研究体表者が平成17年（2005年）より取り組んできた大学生向けのLOD教育プログラムの実践内容を土台とした。それを基に実験的な実践を試み、幼児の心身に合わせたプログラム案を試験的に実践することとした。実践は以下の教育機関で行った。

①H22年（2010）：2月18日　於／文京区音羽幼稚園（東京）対象／4歳～5歳90名　講師：(LOD指導者A.H.ゲスト）主な内容／LODの中のPOB（身体部位；Parts of the Bodyの略称）

②H22 年（2010）：6 月 11 日 於／荏原小学校（岡山）対象／6 歳～12 歳、低学年（1・2 年 42 名）、中学年（3・4 年 57 名）、高学年（5・6 年 52）］ 講師：酒向治子（岡山大学） 主な内容／LOD の中の Springs（跳ぶ５つつの足型）を取り上げて実践を行った。
③H22 年（2010）:11 月 6 日（土）於／はぴす白岡（白岡町）対象年齢／5～6 歳 17 名 講師：酒向治子（岡山大学） 主な内容／LOD の中の POB（身体部位；Parts of the Body の略称）

４．研究成果
（１）理論研究から得られたこと
幼児を対象とした LOD を用いた身体教育法を開発することの利点について、以下の知見が得られた。
①「系統的な学習」という観点からの LOD の有効性
現在生涯学習」をどのように促すかという発想のもと、各発達段階を縦軸に連携していかに教育を行うかという体系的な教育カリキュラムの必要性が問われている。「幼稚園（保育園）と小学校の連携」、「小学校と中学校の発に行われている状況にある。小・中学校の学習指導要領においては、基礎的な身体能力を身につけ、運動を豊かに実践していくための基礎を培う観点から、発達の段階に応じた指導内容の明確化、系統的な学びが奨励されている。言語として体系化された LOD を用いることによって、曖昧になりがちな動きの習得プロセスが明確になり、段階的な学習が可能になることが示唆された。
②幼少時における「多様な運動経験」という観点からの LOD の有効性
2008 年告示の学習指導要領では、前学習指導要領で導入された「体つくり運動」の対象が小学校高学年から全学年へと拡充された。この背景には、日常生活における遊びや身体活動の減少による運動能力が低下している者と低下していない者との二極化傾向が指摘され、生涯にわたる豊かな運動生活を導くために幼少期からの基本的運動能力を底上げしなければならないという切迫した状況がある。LOD は基礎的な動きを多彩に組み合わせて行うために、多様な運動経験を促すとともに身体運動認知（知的理解）を結びつけ、身体運動のより深い理解を促すこと等が導き出されることが想定された。この点についてのより学術的な検討は今後行う予定である。
③幼児の個性と創造性という観点からの LOD の有効性
LOD の創始者である A.ゲストの言説、LOD 指導者である V.ファラントとのインフォーマルな会話データ等より、LOD は運動要素を学習者の主体的選択に任せる場面が多いことから、学習者の個性や創造性を引き出す点で特徴的であることが明らかとなった。日本の幼児の教育現場では、1989 年の『幼稚園教育要領』の改訂以降、表現に関わる内容が従来の技術的指導に陥りがちであった表現教育から、児童の自発的な表現意欲や豊かな感性といった内面重視の教育へと明確な変化を遂げた。それに伴い、身体表現のより効果的な指導法を目指して、絵や線画、音楽などの具体的な方法を検証した実践研究が発表されてきた。LOD は教本 *Your Move* というタイトルが表すように、個々人の動きの創造性を育成することが第一の教育目的となっている。これは、個性・創造性の重視という日本の幼児教育の流れに合致したものである。
LOD による理論研究は上記の挙げた LOD の有効性の検討の他に、LOD の語彙の日本語への変換に伴う理論的な検討を行った。この過程では A.ゲストを招聘し、2008 年に出版さ

れた *Your Move* 改訂版に関する理解が不十分な点についての確認作業を行った。これらの経過を経て、*Your Move* 出版に向けた準備が整えることができた。

（２）実践研究から得られたこと

①指導方法：幼児を対象とした LOD の指導方法では、具体的な運動イメージを幼児に問いかけることが有効であることが示唆された。また、運動要素を技術的に習得する「技術習得型」、もしくは「覚える」ことを目指す「運動暗記型」ではなく、運動のコンセプトのみ提示して子どもたちに考えさせる「探求型」が有効である可能性が示唆された。また、単発的な学習では LOD が目指す身体運動の「探求型」学習が困難であることから、継続的な指導体制が望ましいことが明らかとなった。

②観察内容： 2008 年までの研究代表者の研究により、大学生を対象とした LOD の実践研究では、記号によってゲーム性を採り入れながら動きの学習を進めることによって、ダンスに対する遊び感覚が生まれ、ダンスへの意欲を格段に向上させるとともに心理的抵抗を少なくすることが明らかとなっている（酒向, 2008）。また、小学生を対象として LOD の実践を行った海外の実践報告からも、大人が思うより子どもは LOD 記号に強い興味を示し、遊び感覚で素早く吸収したという（U. ウンロー, *Dancing in the Millennium*, 2000）。本研究で行った未就学の幼児を対象とした実践においても、見慣れない記号を覚えることへの抵抗は見られなかった。文字を覚えるように記号を身体につなげて理解していく様が観察された。

なお、2011 年までの実践結果を ICKL 国際学会（2011）にて発表した際には、ダンスという枠を超えた体育という領域全般に LOD を発展的に適用しようとする試みが評価された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

<u>Haruko Sako</u>, Reiko Morita, Valerie Farrant. “The Possibility of using Language of Dance (LOD) in Japanese Physical Educational Settings.” 2011. ICKL-Proceedings of the Twenty-Seventh Biennial Conference.

〔学会発表〕（計　3 件）

①<u>酒向治子</u>「LOD を用いた創作ダンス指導の実践と課題」日本体育学会第 60 回大会　広島大学 2009 年 9 月

②<u>酒向治子</u>「LOD を用いた創作ダンス II－反復型プログラム構成による授業実践の検討-」日本体育学会第 61 回大会　中京大学 2010 年 9 月

③ <u>Haruko Sako</u>, Reiko Morita, Valerie Farrant. “The Possibility of using Language of Dance (LOD) in Japanese Physical Educational Settings.” The Twenty-Seventh ICKL(International Conference of Kinetography of Laban) 2011. Aug.　Budapest, Hungary.

〔図書〕（計　０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：

発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
NHK 岡山放送局番組（ニュースレポート『リズムケンパで姿勢を正そう』）放映

６．研究組織
(1)研究代表者
三戸　治子（酒向治子）（SAKOU　HARUKO）
岡山大学・大学院教育学研究科・講師
研究者番号：70361821

(2)研究分担者
()
研究者番号：
()
研究者番号：
()
研究者番号：
()
研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：